

		NPO法人 赤煉瓦倶楽部舞鶴 会報	
		発行人/理事長 馬場 英男	
		(連絡先) 〒625-0062 京都府舞鶴市森 875-2	
		TEL/090-3281-7539 FAX/0773-63-9764	
		E-mail brick@iris.eonet.ne.jp	
特定非営利活動法人 赤煉瓦倶楽部舞鶴			
会報 110号 令和2(2020)年1月1日			
「NPO法人赤煉瓦倶楽部舞鶴」ホームページ		http://www.redbrick.jp/	

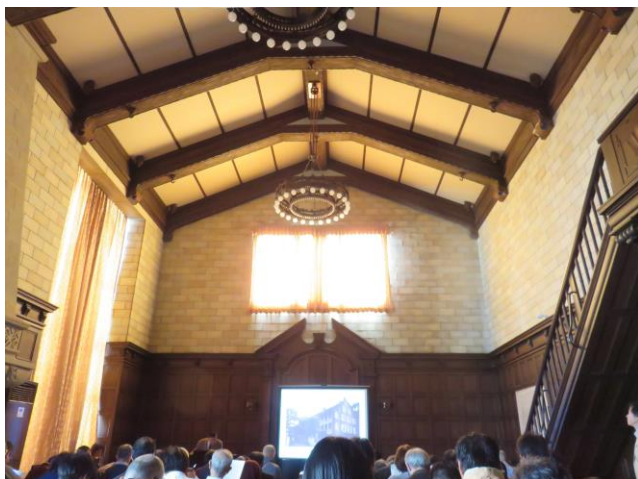
新年明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます。

1 「赤煉瓦ネットワーク岸和田×泉州大会」に参加して	馬場英男	4 舞鶴の戦争遺産3「その後の葦浦史穂」	永井英司
2 「岸和田煉瓦と私」	斎藤米子	5 その他 次回は千葉大会、編集後記	事務局
3 「天才の造った煉瓦と石のドーム」	小野 章		

1. 「赤煉瓦ネットワーク岸和田×泉州大会」に参加して 理事長 馬場 英男 (会員 No. 8)

さる11月9日(土)・10日(日)、「赤煉瓦ネットワーク2019岸和田×泉州大会」が開催された。赤煉瓦倶楽部舞鶴からはお二人の京都市にお住いの2名を含め13名と多くの参加となった。小生は、舞鶴北吸赤煉瓦建物群で多数発見されている刻印の×マーク(※1)の岸和田煉瓦(株)の生産地を訪れるのは初めてである。というのも、煉瓦製造のホフマン窯が全て解体され存在していない事が興味を持たなかった原因であった。舞鶴市立赤れんが博物館が平成5年にオープンしたが、以前数回にわたり、岸和田市議会や市民が視察に訪れ、館内のホフマン窯を模した展示室内に入るなり、必ずと言っても良いほど「ホフマン窯を壊すんじゃないかと」と口々に話されていたと耳にしたのを鮮明に覚えている。もし泉州地区に一つでもホフマン窯が残っていたらもちろん重要文化財に指定される事は必然で、赤煉瓦の街・舞鶴として強敵であったろうと複雑な気持ちになったのも正直な気持ちであった。

さて、一日目9日は、岸和田城北東に位置する岸和田市立泉会館(登録文化財・渡辺節設計)で、13:00から大会が開会された。



永野耕平岸和田市長、米田貴志岸和田市議会議長、齋藤恵子岸和田文化事業協会会長の歓迎挨拶のあと、元大阪学院大学教授の藤原学さんによる基調講演「最古の赤煉瓦」をお聞きした。失礼ながら、原因不明ながら折角のお話をほとんど聞き取れず残念であった。そ

の後の事例報告等については、そう気にすることなく聞くことができた。資料が配布されていたので、スクリーンに映された箇所をなぞる事で理解をした次第である。事例報告では、懇親会場で決定した次期開催地の赤れんがをいやす会共同代表の高木林夫さんから「千葉県血清研究所の現在について」、続いて那覇市市民文化財文化財課開発調整グループ主任学芸員の吉田健太さんから「沖縄の煉瓦遺構について」が紹介された。続いて、パネルディスカッション「岸和田と泉州の煉瓦―その始まりと流通、展開―」では、前述の藤原さん、下関市の高月鈴世さん、地元郷土史研究家の江間一夫さん、今大会の実質的企画者で関西煉瓦流通研究所代表の山岡邦章さんの5名が登場、当時のホフマン窯を見た話、下関英国領事館修復時に岸和田煉瓦を確認した話などフランクな会話が続いた。



17:00閉会后、恒例のネットワーク横断幕を広げ記念撮影を終え、歩いて5分ほどの懇親会場に移動。岸和田城南に位置する市指定文化財である豪邸の後を料亭にしている「五風荘」での懇親会、会費5千円とは信じがたい料理と飲物で皆さん満足、失礼ながら、各地からの報告も喧噪で聞き逃し見慣れたお顔を確認し挨拶する程度に終わった。

翌日10日(日)は見学会日、ホテルを8:30出発、歩いて5分程度の南海電鉄岸和田駅のコインロッカーに荷物を預け、集合場所の駅まで約15分歩き蛸地蔵駅に到着。多くの参加者が集合し主催者による見学コースやスケジュールの説明の後、A・B二つのコースに分かれて9:00に出発した。Aコースは、岸和田のまちなみと近代建築まちあるき、Bコースは、岸和田のマニアック煉瓦まちあるき

である。小生が参加したBコースで最初に訪れた旧寺田紡績工場は当初の用途を終え、現在は倉庫として活用されている様子で、やがては解体の議論が出るのかと危惧した。



旧寺田紡績工場（現 テラボウ（株））

今後危惧が現実のものとなった際に、先の泉州地区でのホフマン窯解体の轍を踏まない様、市民の赤煉瓦に対する想いが試されるのではと感じた。そういう意味でも、今回の赤煉瓦ネットワークの大会開催で、市長、市議会、市民に与えたインパクトは大きいと思う。

これまで永年にわたり各地の煉瓦建物の保存活動を支援してきた赤煉瓦ネットワークの真骨頂になれば幸いである。

今後の取り組みとして、既に岸和田の大会事務局に提案した内容だが、街中に残る塀・建物跡基礎・校門などをマップにまとめる作業、泉州地区で生産した煉瓦の消費地への流通調査書の作成などを期待したい。最後にあたり、準備・当日と大変お世話になりました。大会実行委員会の皆様に御礼申し上げます。

(※1) 刻印×マーク：岸和田煉瓦を興した山岡伊方は旧藩主の勧めでクリスチャンに改宗、同志社大学創立者の新島襄とも親交があり、布教の拠点を岸和田、山岡家としていたためか、岸和田煉瓦の前身である第一煉瓦（株）の社章「×」のセントアンドリュースを自社の煉瓦にこのクロスを押印したとされる。

[赤煉瓦ネットワーク2019大会資料より]

2. 「岸和田煉瓦と私」

齋藤 米子（会員No. 22）

私は昭和11年、東舞鶴で生まれました。当時、私の父は海軍工廠・機関学校などの御用商人をしていまして、家の倉庫には納入品のハンパ物不合格品が入れ替わり運び込まれていたようです。そのなかに、赤煉瓦もあり、小学生だった私は家の前の寺川の洗い場で煉瓦と煉瓦をこすり合わせ「赤い汁」を作り、ままごとの御馳走の一品にしました。又、不用になって川に捨てられた煉瓦に付いた藻を集めて乾かして、糸でぐるぐる縛ってボールを作り友達と遊びました。そんな訳で平成3年頃新聞で舞鶴に赤煉瓦倶楽部が出来ると知り、すぐ反応して入会させていただきました。

私の主人は岸和田に実家があり、山岡伊方(※2)の曾孫にあたります。庭をはさんで山岡伊方旧居である武家屋敷と蔵が今も残されています。その母屋には古い文書(岸和田煉瓦、同志社、女性史)が保管されていますので、調査研究の人たち数名が集まって作業を進めておられました。



山岡伊方旧居

私も何とはなしにお手伝いする様になり、末席を汚しながら現在に至っております。岸和田通いのなかで忘れられないのは、多くの史料の中でたまたま明治34年度の伊方さんのメモ(日記)に舞鶴海軍の文字を見つけ、一瞬岸和田と舞鶴が破線でつながった様に思われました。

更に今から十余年前、私達の終いの住處として岸和田の南の方に土地を求めました。そこは紡績会社の跡地とは聞いていたのですが、何とそこで岸和田煉瓦を掘り出したのです。目がくらくらとする程うれしくて、伊方さんのウイंकを感じました。

この秋には岸和田で「赤煉瓦ネットワーク大会」に参加させていただき、大きな発見や感動を覚えました。でも嬉しいのは私達だけでなく伊方さんが一番喜んでくれたと思います。もしかして、あの見学コースの最後尾にスニーカー姿の伊方さんが千の風になって参加されていたかも・・・そんなキャラクターの人だと思います。

今回の企画を一つのスタートとして、いろんな視点から岸和田煉瓦に残されたメッセージを、共に分かち合えればと思います。

感謝を込めて。

(※2)山岡伊方(やまおかただかた)：旧岸和田藩士で、廃藩置県に伴い土族の授産事業として元々岸和田藩の台場があり闘兵場のあった地に、岸和田煉瓦の前身の煉瓦製造所を明治5年に興した。

[赤煉瓦ネットワーク2019大会資料より]

3. 「天才の造った煉瓦と石のドーム」

小野 章（会員No. 9）

ふた昔ほど前にイタリアの古都フィレンツェを訪問し、町のシンボルともいべきサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂を見上

げた。カメラのフレームに収まらない高さ107mの巨大な建物であった。ドームの基台高は52mでその上に煉瓦とモルタルと大理石で

構成された優雅なドーム（クーポラ）が鎮座する。

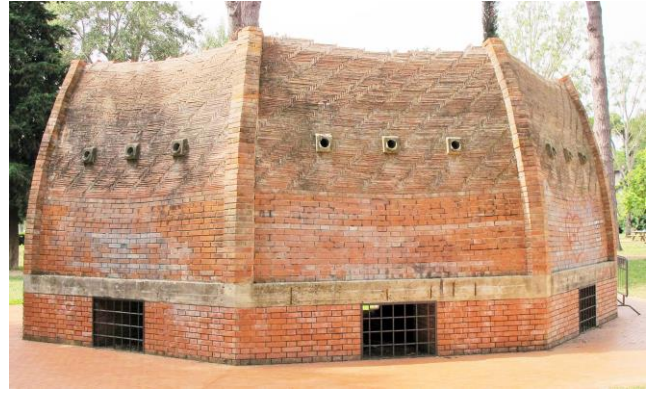


フィレンツェ中央に聳える大聖堂

このドームの最大内径は 45m であり、それまで 1300 年以上世界最大のドームであったパンテオン（ローマ、128 年）の内径 43.2m を凌駕し、200 年後に建設されたサン・ピエトロ大聖堂（バチカン市国、1626 年）のドームの内径 42m、セント・ポール大聖堂（ロンドン、1710 年）のドームの内径 34m、果ては米国連邦議会議事堂のドーム（ワシントン、1866 年）の内径 28m をはるかにしのぐスケールである。このドームが建設されてから大地震が 3 回記録されているが、それに耐えて現在に至っている。

その後 20 世紀以降に初めてこの大聖堂を凌駕するドームが出現したが、鉄骨など近代的工法によるものであり、煉瓦と大理石のみの材料によるものではない。600 年前にこのドームを構造計算なしで設計・建築したフィリッポ・ブルネレスキは、まさに天才と呼ぶべき人物であろう。

ブルネレスキは 1377 年に生まれたが、既に大聖堂の礎石は 1296 年に据えられていた。1380 年に聖堂の身廊、続いてドームの基台となる八角形の壁体が 1410 年代に完成した。1417 年頃彼はドーム設計の依頼を受け大型模型を製作、審査を受けた。彼が総監督としてドーム建設に着手するのは 3 年後の 1420 年、完成するのは 1436 年である。彼の没後ドームの上に別の設計者による頂塔を設置し終えたのが 1461 年で、礎石を置いてから 165 年が経っていた。



実証的に制作された大聖堂ドームの構造模型(フィレンツェ郊外)



ドーム構造模型の細部(煉瓦の矢筈積みの部分)

ドームは分厚い内壁と薄い外壁の二重構造になっており、上部 3 分の 2 の煉瓦は「矢筈(やはず)積み」されている。この積み方は水平の長尺煉瓦が短尺煉瓦が狭む形で湾曲する壁を養生中でも支え、迫枠(せりわく)なしの工法に貢献したとされる。彼は 10 年以上ローマに滞在しパンテオンなど古代ローマの遺跡を検分、煉瓦とモルタルによる構造例をドーム設計に生かしたという。正に古代文明の復興(ルネサンス)の草分けである。

ブルネレスキは、建設中は現場に泊まり込み仕事に熱中したという。サグラダ・ファミリア教会建設中に現場で寝起きしたガウディと同様である。なお両者とも独身であった。彼は 1446 年に 69 歳で亡くなり大聖堂の一角に埋葬された。もう一人の天才ダ・ヴィンチはその 6 年後に生まれた。

4. 舞鶴の戦争遺産 3 「その後の葦浦史穂」

(森林インストラクター)永井 英司

ちょっとキャッチーなタイトルにしてみました。
2012 年に第三火薬廠のミニ写真集を出版した葦浦さんは、その直後から、次は舞鶴要塞の写真集を出すと言いだし、1 年近く掛けて、舞鶴要塞 6 カ所と倉梯山防空砲台を永井といっしょに回りました。雨の日も雪の日もあり、倉梯山防空砲台は 1 回目は大変寒い雨の日で、当時、永井はしっかりと場所を把握していなかったため、現場にたどり着かず、2 回目にしてようやくたどり着けるというような状況でした。

この写真集は、第三火薬廠写真集が 16 ページだったのに対して、サイズは少し小さいものの 32 ページ。「Every day, from it. そこからの日々 日本海戦争遺産」と題して、2013 年の夏のコミケで発売されました。

これには位置図も付いているのですが、めっちゃ不正確な位置図で(永井は校正等にはノータッチ)、これを信用して倉梯山防空砲台に行こうものなら遭難してもおかしくないような位置図でした。

幸か不幸か、そのせいもあってか、砲台遺構もそう荒らされると

ということもなく現在に至っています。

ところで、舞鶴要塞の6砲台は皆さん行かれたことはおありでしょうか。案外、難易度が高いのが浦入砲台かなと思います。発電所ができるときに遺構はなくなったと思われる方も多いようですが、半分程度遺構が残っています。また、隣接して海軍水雷衛所も残っており、貴重な遺構と思います。この水雷衛所、水雷衛所という名前で出版物に記載されたのは葦浦写真集が初出かと思えます。



また、倉梯山防空砲台のモルタルれんが遺構は、アプローチがわ

かりにくく、案内なしでは難しい場所です。これまでに、公開見学会が少なくとも2回開催されていますが、そういう機会がないとなかなか行けない場所と思います。また、見学会も企画します。

そして、葦浦さんは3年目企画として、鉱山遺跡めぐりを企画し、いくつか案内しましたが、結局、なかなかネタが続かず、この企画はオシャカに。いや、休眠しているだけか？

その後、永らく葦浦さんとも会うこともなかったのですが、ことし4月の浦入砲台探訪会に参加してくれました。ご主人の実家が舞鶴とのことで、舞鶴との縁は今後も続くようです。

5. その他 編集後記

事務局

1. 今年の赤煉瓦ネットワーク2020大会開催地について

昨年開催の岸和田大会で、次回の大会開催地は、千葉県市川市に決定した。2002(平成14)年まで戦後約60年間千葉県立血清研究所として、伝染病ワクチン製造を行ってきた赤煉瓦建物の保存活動を行っている「赤レンガをいやす会」が主催者となる予定である。

この赤煉瓦建物が現存する市川国分台は、かつて旧陸軍教導団として建設され、下士官教育から始まり、日清戦争では兵力で実戦に加わるなど質を変えたが、役割を終え明治32年教導団は廃止された。その後も施設を実戦の軍隊、野戦砲兵第1連隊、第16連隊、

第17連隊が駐屯し、太平洋戦争終戦まで継続して陸軍用地として使われた地である。現在、付近には、東京医科歯科大学、千葉商科大学、国立国際医療研究センター国分台病院等があり、文教、医療地区である。

数年前から、「赤レンガをいやす会」から保存活動についてアドバイスを求められてきた経緯もあり、是非参加して保存活用に向けた支援をしたいと考えている。今後、参加募集については、会報(8月1日発行予定)で行う予定である。

2. 編集後記

新年早々に深刻な話で申し訳ないが、時はあっという間に流れていくので、ご容赦願います。

さて、当会は、平成3年に任意団体の「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」として約150名の会員(現在は50名)で発足、平成12年にNPO法人化し、「特定非営利活動法人赤煉瓦倶楽部舞鶴」に名称変更し、目的達成のため積極的に活動を行ってきた。しかしながら、毎月開催している当法人理事会で、数年前から話題にしている事であるが、会の目的とした「赤煉瓦の街・舞鶴」も名実ともに定着し、現在では役割をほぼ終えたのではと考えるに至っている。また、NPO法人としての事務手続きが大変な重荷となっている。京都府への毎年

の実績報告書提出、役員変更時の届出、定款変更届出、また、法務局への定款・役員変更等の届出などが必要となっている。そこでこの際、NPO法人を解散返上し、以前の様な任意団体に戻りたいと考えている。もちろん、来年6月に開催予定の通常総会で、議案提出し承認を得る必要がある。

今後も従来どおりの活動は継続する予定であるが、事務処理のスリム化を図りたいと考えているのでご理解いただきたい。

ついては、会員の皆様からの忌憚のないご意見・ご感想等お寄せいただければ幸いです。

(h. b)

会員資格： 会費納入者(特別会員は除く)。入会金1,000円、年会費(個人2,000円、法人10,000円)。
なお、会員申込用紙は、ホームページからダウンロードできます。ご寄附も受け付けます。
会費・寄付金等 振込先： ゆうちょ銀行 口座番号 (01010-6-21476) 加入者名： 赤煉瓦倶楽部舞鶴